

村上 専精

生い立ち



嘉永四年（一八五一年）四月一日、丹波国氷上郡船城村野山（現・春日町）の教覚寺（真宗大谷派）に広崎宗鑑の長男として生まれた。この寺のある場所は僻地寒村であり、極めて貧乏な寺であったが、父宗鑑は、近くの子弟を集めて学問を教えるなど教育には非常に熱心であった。明治五年（一八七二年）の学制発布によって各地に小学校が開設され始め、六年には「又新舎」と称して、現在の春日町立船城小学校の前身が、この教覚寺において誕生したのである。また、翌七年から十二年までは、野山学校と称していた。広崎宗鑑はこれらの学校の初代校長ということになり、現在でも、船城小学校の校長室に初代校長としての袈裟衣の絵姿が掲げられている。

父の厳しい指導のもとに毎朝暗いうちから起きて、三部経（大無量寿教、観無量寿経、阿弥陀経）という非常にむずかしいお経を教えられた。習いながら頭をたたかれない日はなかったというように厳しかったが、七才までに全部読めるようになった。このことは後に

考えて、自分自身をつくる基礎をなしたと感謝されている。

家が貧しいため、八才の頃から他の寺に預けられたが、その間、農業に従事しつつ「大学」「中庸」等を学んだこれが学問に志す端緒となったのである。

仏教学の研鑽

十八才のとき、初めて播磨の姫路に遊学し、毎日市内を托鉢しながら、姫路市両塩町の善教寺、結城義導（号・天外）師について漢籍を学んだ。明治元年（一八六八年）の神仏分離令により廃仏毀釈の運動が盛んになり、仏教界に大打撃を受けるようになった。そのような状態のなか、仏教の復興に革新的風潮が見られない状況を知るにつけ、自分は寺に生まれた者でもあり、仏教の学問を学ぶべきであると悟った。

仏教の学問を志すには、京都が最適であった。しかし京都で学問を志すには費用がかかるので、越後（新潟県）の真宗大谷派無為信寺に武田行忠師が私塾を開いて講義しており、

その名声は真宗学界に鳴り響いていた。そこで専精は、越後に行くことを決意した。そこで両親は苦心して九両二分の費用を工面された。

明治四年（一八七二年）二十歳のとき、両親に別れを告げて丹波より越後に向かうこととなった。当時は鉄道のない時代であり、一五〇里の道を三〇日ほどかかり、越後の北蒲原郡水原町の無為信寺、武田行忠のもとに着いた時には、僅か一両一分しか残らなかった。このお金で夜具を購入する必要もあったが、これらを買わずに学問をするに必要な筆墨・用紙を購入したときには無一文になってしまった。そこで寺の水汲み、飯炊き等の仕事をする学僕となつて働きつつ『曜識三十述記』という大変難しい仏教学の講義を聴き、勉強したのであった。

明治七年（一八七四年）、仏教学のもつとも盛んな京都に行くことを決意し、辺境の越後から京都に赴き、高倉学寮に入学したが、仏教界の混乱や、学寮騒動に巻き込まれ一年で退学してしまった。

それから知人を頼つて三河国（愛知県）へ行き、宝飯郡御馬村（愛知県豊川市御津町御馬字西）の真宗大谷派海山入覚寺の村上界雄の婿養子となり村上姓を名づけることとなった。この寺は檀家が二〇〇戸ほどの比較的裕福な寺であったが、田舎の寺で安穩と住職の仕事に甘んずることができず、親戚や檀家の反対を押し切つて寺を出て再び学問研鑽の途へと進んだのである。

業績

明治十五年（一八八二年）初めて京都の高倉学寮で行う身分となった。その頃には村上専精の名は遠く東京に聞こえ、曹洞宗大学林や哲学館（現・東洋大学）で『成唯識論』『七十論』の講義を行った。また、明治二十二年（一八八九年）、神田区今川小路に仏教講話所を開設し、青年男女に対し仏教精神の理解を深めることに努力した。

仏教学においては歴史的に研究することがおこなわれていることに気づき、門下の鷲尾順敬、境野黄洋等と共に、『宗教史林』『日本仏教史綱』を著し大いに仏教史研究の気運を高めた。これらの研究発表が認められ、明治三十三年（一九〇〇年）文学博士の学位を贈られた。

明治三十四年（一九〇一年）に『宗教統一論 第一編 大綱論』を出版すると、村上専

精は大乗非仏教説を主張するものと誤解して真宗大谷派より排斥されたので、[『]予が真宗大谷派の僧籍を脱するの告白書』を本山に提出し、自ら僧籍を脱して、宗門を離れ学者としての所信を堅持した。

大正六年（一九一七年）、東京帝国大学（現・東京大学）に印度哲学科を創設し、学者としての最高の名譽である帝国学士院（現・日本学士院）会員に勅選された。大正十三年（一九二四年）には東京帝国大学名誉教授の称号を受けた。また、東京帝国大学には講堂がないのを歎き、その頃財界の巨頭であった安田善次郎（富士銀行の創始者）を説得して当時、百万円の寄付を勧め、講堂を建設したのである。東京大学の講堂を安田講堂と名付けられているのはこのような由来があるのである。

東洋女学校（現・東洋女子高等学校）の創立

専精が仏教史学の研究に際し、高僧の伝記によると、いずれも母親がすぐれていることに気付き、将来、国家、社会に有為な人物を育成するには母親となる人、すなわき女子

の教育が重要であると痛感し、仏教精神に基づく女学校を創立することを決意した。明治三十八年（一九〇五年）に小石川丸山町の新校舎で開校式が挙行され、早稲田大学総長、大隈重信の祝賀演説に満堂感激したのであった。専精は初代校長として修身科を担当した。経営にあたつては非常に苦労されたが、大正十四年四月十六日、創立二十周年の記念式を挙行し、校長職を二代和田県に譲った。

社会教化に尽力

村上専精は仏教学の先覚者として偉大な業績を残したばかりでなく、広く社会において、世人に対しても仏教的に啓蒙しようと寸暇をさいて努力した。神田に仏教講話所を開設し、青年男女に仏教講話を行い、また東洋女学校の講堂、至誠堂で毎月第二日曜日



は校外一般の聴衆に対し講演し、その原稿を個人雑誌『天道講話』に掲載した。

また地方講演を行い、社会教化に尽くした。大正二、三年には、東北地方巡回講演に出張、一日帰京してから、丹波、滋賀、愛知に講演に出かけた。大正六年には大陸に渡り、ハルビンまで出かけることもあった。

また、専精の門下には、多くの逸材が生まれている。境野黄洋、鷺尾順敬、宮本正尊、木村泰賢、花山信勝、常盤大定、高島米峯、安藤正純、藤岡勝二、宇井伯寿、結城令聞、辻直四郎の諸氏が輩出し、明治から昭和にかけて思想界に名を残している。

人柄

村上専精は貧寺に生まれながら、努力精進して生活のうちに仏教を学びとり、旺盛な向学心と強固な意志により独自の道を開拓した。また、自己に厳しく、誠実、寛容であり、小さい事にこだわらぬため、修業中や学問研究に当たって困難に遭つても常に人々の好意によつて道が開かれ、よき師、よき友人に恵まれた。さらに、宗教界のみならず学界、政界にあらゆる人物から敬慕され、財界の巨頭、安田善次郎との交流もあり、その人物像はまことに偉大というべきである。

人生の箴

一 處せうため一日も怠るべからざる
ものは其方の徳なり
一 徳立のため一日も怠るべからざる
ものは其方の徳なり
一 終身のため一日も怠るべからざる
ものは其方の徳なり
一 人生のため一日も怠るべからざる
ものは其方の徳なり
一 公世のため一日も怠るべからざる
ものは其方の徳なり
一 徳立のため一日も怠るべからざる
ものは其方の徳なり

親に対する誠

專精は郷里の教覺寺を出て學問を志し、さらに養子先の三河の入覺寺においても、寺を捨てて學者としての道を一途に歩んだことは、結果としては親や郷里の名を挙げたことになったのであるが、常に両親に対し申しわけない気持ちと同時に、深い感謝の念をもつていた。

大正七年（一九一八年）學士員會員に勅選された年の天長節に、新調の大礼服を着て参内した。そのとき、大礼服姿の写真を撮り、丹波の両親のもとへ送った。これはただ両親を喜ばせるというだけでなく、深い報恩の気持ちであつたと思われる。

明治四十二年（一九〇九年）に盛岡市での講話のため、八月一五日、宿泊地のある花巻駅で「タンバノチ、キトク」の電報を受け取つたが、公開演説を断るわけにいかず、演説を済ませ、一七日に郷里に着いた。しかし時すでに遅く、父は昨日に他界したとのことであつた。專精は父の遺骸に平伏し、孝養の行き届かなかつたことを悔み、暫時暗涙にむせんだという。專精はそれより明治三十三年、父の徳をたたえこれを永く後世に残すため碑を建立した。この碑は現在でも教覺寺境内に残っている。

我父諱宗鎧姓広崎幼名信曆後號覺夢院以文政十一年十〇
五日生於教覺寺其考諱宗慧妣矢野氏生二男父即其嫡子〇
資性明敏而質素自奉甚薄矣幼時為叔父矢野乾明所養又隨
矢野乾了遊歷午諸邦講習教導嘉永元年想父母之情深遂歸
国生職於生寺越年娶子天田郡野花村松原氏即與矢野氏同
村也舉四男二女余其長子也然有故冒村上氏矣蓋父生長於
閭巷之小寺而際子德川氏幕末庠序之設未備講學之術未開
立身無道可謂不得時與處者也然有其志不可奪克己以自勤
所以余等兄弟之家訓極嚴也而深信仏教固守祖訓能盡僧業
又教有傍近之子弟于茲四十餘年今距古稀已三歲霜髮鑠尚
不倦可謂勉旃矣於是乎衆嘉其行人歸其德所以寺大興焉頃
者門弟數輩相議建壽碑於其寺欲以伝于後乃使余叙事余固
不文然親恩海岳豈可辭哉爰錄爰鐫

明治三十三年七月 日

男 文學博士 村上專精謹撰併書

明顕寺と教覚寺のその後

丹波の郷里、野山村の約四キロほど南にある柏原町に明顕寺という寺があったが、だれも管理するものがなく屋根は雨漏り、床は抜けるという状態であった。それを見て、専精と父宗鑑は、同じ浄土真宗の寺がこのように荒れていることを嘆き、何とか再興したいと考えた。そこで、専精の妹で市島町の代官青木家に嫁した教枝の娘良に養子を迎えて、明顕寺を再興させたのであった。教覚寺は後継者がなく廃寺となってしまったので、広崎家代々の墓所その他をすべて明顕寺に移した。大正四年（一九一五）十月、宗鑑の七回忌法要をこの寺で行った。また専精の二番目の弟専心は、出雲国大東町の宗専寺の養子となり、和多田を名乗った。このように兄弟がそれぞれに家を出て、自分の寺を継ぐことはなかった。したがって教覚寺は廃寺となったが、郷土の偉人として野山地区の篤志家の手で改修され、本堂はいまだ保存されている。

船城小学校の発祥

教覚寺は明治六年（一八七三）学制発布により「又新舎」と名づけられて小学校として発足。後、野山学校と呼ばれ、同十二年までこの場所で教育が行われていた。これが現在の船城小学校発祥の地であるとして、春日町教育委員会においてもその存在意義が認められている。

教覚寺に隣接する篤農家。山本家には今でも三面の襖すべてに村上専精の雄渾な書が残されており、いかに農村の人々の郷土愛や祖先を思う心情、連帯感が深いかを知ることができる。

船城小学校に安置されている

村上専精胸像

船城小学校には、郷土出身の偉人として村上専精とほかに井上秀（日本女子大第二代校長）の二人の木彫りの胸像が安置されており、卒業式をはじめあらゆる機会に故人を偲び、

教育の指針とされている。春日町では、一東洋高等女学校の創立者というだけではなく、それ以上に広い立場で国家的、社会的に偉大な仏教学者村上専精を郷土の誇りとして永く心のなかに刻み、子孫に伝えていこうとしている気持ちがよくわかるのである。

